

くち ぶち
鞍が淵の紹介

上田市塩田平の南、周辺のなだらかな山々と異なり、ごつごつとした姿で、ひときわそびえる独鈷山とっこざんがあります。

そのふもと、塩田平を潤す産川の上流（沢山湖の直ぐ下）に、大きな岩が点在する神秘的な溪谷があります。

特に鞍岩と呼ぶ馬の鞍に似た大岩の淵は「鞍が淵」といわれ、伝説「小泉小太郎」誕生の地として親しまれています。



製作所：西塩田地区振興会
住所：〒386-1433 長野県上田市手塚
製作日：平成19年1月1日初版

昔、独鈷山の頂にお寺があり、若いお坊さんが住んでいました。このお坊さんのもとに毎夜美しい娘が通ってききました。真夜中に何処から来て何処へ帰るともわからない。お坊さんは長らく暮らすうちにいぶかしく思い、ある夜、娘の着物の裾に針をつけ、糸を繰り出しました。夜があげてみると、糸は戸の節穴から抜けて山の沢を下り、川の上流にある鞍が淵の岩窟の中央まで続いていました。

見ると大蛇がとぐろを巻いて、赤児あかこを産もうと苦しんでいる様子。お坊さんは驚いて逃げ帰ってしまいました。娘は鞍くらわが淵たいげの主の大蛇の化身けしんでした。大蛇は刺された針の鉄の毒のために弱り、かつ自分の姿を見られてしまったことを恥じて生まれた児を鞍岩の上に置き、自分はここで死んでしまいました。

そのためこの川の名は産川といわれるようになりました。

その後、大雨が降って洪水が起こり、大蛇の遺骨は下流に流され、蛇骨石として散らばりました。

生まれた児は小泉村の老婆に育てられ、小泉の「小太郎」と名づけられました。

小太郎が十四、五歳になった頃、老婆が「我が家はさほど豊かではない。年ごろの養育も容易ではない。今は一人前の大人になったのだから、婆のために少しは手助けをしておくれ」といいました。

小太郎は生まれつき小兵ではあったけれども、体は逞しくて、毎日、大食して何一つ仕事を
したことがありませんでした。

そこで小太郎は小泉山に出かけ、薪取りをしました。そして一日で山にある限りの萩の木を根こそぎにして力をこめてたった二抱えほどの束にして夕方帰ってきました。そしてお婆さんに「この結び縄を解かないで一本ずつ抜いて焚きな。山中の萩の木だからな」といいました。

老婆は「よしよし」と答えたが腹の中で「一日仕事で山中の萩の木なんぞ取れるものか。こんな小束にまとまるものか」とこぼかにして、小太郎の留守に結び縄を解いてしまいました。すると萩はたちまちはぜくりかえって家一杯に広がり、老婆は萩に押しつぶされて死んでしまいました。それから後、小泉山には萩の木は一本も生えていないといわれています。

また、小太郎の子孫は長くこの地に住んでいるが、横腹に蛇の鱗のあとがあるといわれている。
ます。

(参考 小縣郡民譚集)

童話作家の松谷みよ子さんは、この「小泉小太郎」と松本・安曇野地方に伝わる「泉小太郎」伝説をあわせ、なおかつ、秋田県の八郎潟に伝わる岩魚三匹を一人で食べてしまったために龍に変身した物語から「龍の子太郎」が創作され世界的な童話の名作がうまれました。鞍が淵は「龍の子太郎」のふるさといえます。